平成２４年千葉県歯科医学大会抄録

「解剖学的知見を加味したパーシャルデンチャーの設計」

東葛北支部　松平　浩

パーシャルデンチャーの設計において「動かない」「壊れない」「汚れない」という大原則があり、そのために力学的・理工学的なことに重点をおいて様々な研究がなされて材料はかなり良いものが昨今販売されている。それは良いことであるがそれでも壊れたり口腔内を破壊してしまうことがしばしば見受けられる。

クラスプやバーが丈夫に適合良く製作されていたとしても床外形の設定位置や鈎歯の選定・咬合の与え方を間違うと結局口腔環境の破壊を招いてしまう。逆にクラスプが壊れたから鈎歯が守られ助かったという場合も少なからず拝見するし、それを意図して義歯製作をする場合もある。また、研磨面形態やポストダムの与え方によってクラスプを減らしたりすることも可能である。

上記のようなトラブルを完全になくすことは無理かも知れないが、設計理論を前面に押し出した術者満足の補綴物ではなく患者満足になるように個人個人の生体を把握し診断設計をしていくことが大切ではないかと考える。